

TRAPPIST-1 Habitable Atmosphere Intercomparison (THAI): motivations and protocol version 1.0

人見祥磨

2020 年 11 月 17 日

概要

ジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡 (JWST)、欧州超大型望遠鏡 (E-ELT)、30 メートル望遠鏡 (TMT)、巨大マゼラン望遠鏡 (GMT) などの望遠鏡¹⁾は、近くの M 型赤色矮星を周回する岩石からなる系外惑星の大気を透過・発光・反射分光法を用いて特徴づけることができるようになるかもしれない。最も有望な候補のひとつは、後期 M 型赤色矮星系の TRAPPIST-1 であり、7 つの既知の惑星があり、それらが地球型惑星であり、揮発成分が濃縮されている可能性をトランジット法 (TTV) が示した。これら 7 つの惑星の中で、TRAPPIST-1e には、地球に入射する放射の約 66% が入射していて、地表の液体水が存在するために地表温度を上昇させるためには、わずかな温室効果ガスが必要であることから、ハビタブルな地表条件を持つ可能性が最も高いと考えられている。したがって、TRAPPIST-1e は、大気を特長づけるため JWST による主要な観測対象のひとつである。このような観点から、TRAPPIST-1e の潜在的な大気をモデル化することは、観測に先立って必要なステップである。全球気候モデル (GCM) を用いることで惑星大気を最も詳細にシミュレートすることができる。しかし、GCM の間には異なる気候予測を導くような本質的な違いが存在していて、それゆえ雲やガスの透過スペクトルや熱放射スペクトルの観測可能性にも違いを生む可能性がある。このような違いは、観測に先立って知っておくべきである。この論文では、惑星 GCM を相互比較するためのプロトコルを紹介する。TRAPPIST-1e については 4 つのテストケースを検討したが、この方法は他のハビタブルな地球型系外惑星についても適用することができる。この 4 つのテストケースには、現代地球と同じ大気組成と、純 CO₂ の組成を持つ大気の、2 つの陸惑星、およびそれぞれ同じ大気組成の 2 つの水惑星が含まれている。現在、4 つのモデル (LMDG, ROCKE-3D, ExoCAM, UM) が参加しているが、このプロトコルは他のチームも参加できるようにすることを目的としている。

1) ここで挙げた望遠鏡については、付録 A で紹介する。

目次

1	イントロダクション	2
2	TRAPPIST-1e の気候シミュレーションと動機	3
2.1	惑星 GCM を相互比較する動機	4
3	THAI プロトコル	4
4	アウトプット	4
5	要約	4
	付録 A 望遠鏡について	4
A.1	ジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡 (JWST)	4
A.2	欧州超大型望遠鏡 (E-ELT)	4
A.3	30 メートル望遠鏡 (TMT)	4
A.4	巨大マゼラン望遠鏡 (GMT)	4

1 イントロダクション

M 型赤色矮星は銀河系の中で最も普遍的なタイプの恒星であり、M 型赤色矮星を周回する地球型系外惑星は、ジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡のような今後の天文学的な施設にで最初に観測される可能性が高いと考えられている。超低温矮星 ($T < 2700\text{ K}$) は晩期の M 型赤色矮星のサブクラス (substellar class) であり、太陽近傍の天体のうち、約 15 % を占めている (Cantrell et al., 2013)。他のタイプの恒星に比べてサイズが小さいので、閉じた軌道にある地球型惑星の発見が容易で、その可能性は TRAPPIST-1 が最近発見されたことによって認知された (Gillon et al., 2016, 2017)。地球から 12 パーセクの距離にある TRAPPIST-1 は 7 つの惑星が知られており、そのなかのひとつの惑星は岩石惑星系の中でも特にトランジット信号の深さが深く、フォローアップ観測の可能性が最も高い惑星のひとつである (Gillon et al., 2017; Luger et al., 2017)。TRAPPIST-1 をトランジット法で観測した結果、揮発性物質の組成が地球に類似していることをがわかり、水が存在する可能性についてもわかった (Grimm et al., 2018)。さらに、e, f, g みっつの惑星がハビタブルゾーン (HZ; Kopparapu et al., 2013) にあること、すなわち地表面に液体の水が存在できるような気温であることがわかった (Gillon et al., 2017; Wolf, 2017, 2018; Turbet et al., 2018)。

TRAPPIST-1 は活発な M 型赤色矮星で (O'Malley-James and Kaltenegger, 2017; Wheatley et al., 2017; Vida and Roettenbacher, 2018)、惑星大気が存続することが非常に厳しい環境となっている。しかしながら、Bolmont et al. (2017) と Bourrier et al. (2017) は、惑星が初期に水をどの程度持っていたかによって、TRAPPIST-1 の惑星が現在まである程度水を保持しうると主張している。そして、この水が十分に残っていると仮定すると、TRAPPIST-1 は非常に大きな大気による調整によって、全球的あるいは局所的にハビタブルな状況を維持できると考えられている (Wolf, 2017; Turbet et al., 2018; Grootel et al., 2018, and references therein)。これらの惑星を分光透過法で特徴づける最

初の試みは、de Wit et al. (2016, 2018) がハッブル宇宙望遠鏡 (HST) を用いて、6 つの中心に近い惑星に対して行ったものである。その結果、TRAPPIST-1 の惑星には、雲やヘイズのない H_2 が支配的な大気が存在せず、 N_2 , O_2 , H_2O , CO_2 , CH_4 といった平均分子量が大きい成分が支配的な大気が存在する可能性がわかった。実験室での測定値とモデルの結果から、雲やヘイズを伴う H_2 が支配的な大気も除外できるとわかっている (Moran et al. 2018)。これらの HST を用いた観測の不確かさは、百万分の一 (ppm) のオーダーと非常に大きく、水素より重い大気の性質を決定するためには、JWST (Barstow and Irwin, 2016; Morley et al., 2017) のような将来の施設を用いた更なる調査が必要である。

将来、JWST が TRAPPIST-1e を特長づけることの上流では、観測の指針となる大気の制約条件を導き出すことが重要である。この目的のためには、3 次元の全球気候モデル (GCM) が最も先進的なツールである (Wolf et al., 2019)。しかし、GCM は非常に複雑なモデルであり、様々な理由によって、モデルごとに出力が違ふことがある。GCM の比較は、地球化学の分野では広く行われてきた。例えば、1995 年に開始され、現在のバージョンが 6 である Coupled Model Intercomparison Project (CMIP) (Eyring et al., 2016) は、人為的な気候変動の要因に対する GCM の応答の違いに焦点を当てている。系外惑星は気候モデルの研究者からかなり注目されており、地球に似た大気を持つ系外惑星のデータがすぐに発表されるかもしれないが、惑星 GCM の相互比較はひとつしか発表されていない (Yang et al., 2019)。この相互比較は、M 型赤色矮星周辺の惑星を対象としたモデル間で、大気の力学及び雲と放射の輸送の違いによって、全球の地表面温度に大きな違いがあることを発見した。しかし、Yang et al. (2019) はハビタブルゾーンの内縁にある惑星に関心をもち、高度に理想化された惑星構成に焦点を当てている。別のモデルの相互比較が系外惑星コミュニティのために実行されていることに注意せよ: the Palaeoclimate and Terrestrial Exoplanet Radiative Transfer Model Intercomparison Project (PALAEOTRIP)²⁾。この実験のプロトコルは Goldblatt et al. (2017) に記載されており、その目的は古気候や系外惑星の科学に使用されている様々な放射に関するコードを比較し、各モデルが正確な結果を出すことができる境界条件を特定することが目的である。TRAPPIST Habitable Atmosphere Intercomparison (THAI) の目的は、近い将来 JWST や地上の施設を用いて特徴づけられる可能性のある確認済みの系外惑星 TRAPPIST-1e の GCM シミュレーションの違いを明らかにし、その違いが観測データから大気のプロパティを解釈することにどのような影響を与えるかを評価することである。また、本論文で紹介した GCM に限定されない、他の GCM が相互比較に参加できるような明確なプロトコルを提供することも目的である。相互比較の結果については次の論文で発表する予定である。この論文では、TRAPPIST-1e と GCM の紹介を含めた動機を 2 節で述べる。3 節では GCM で設定する全てのパラメーターを記述した THAI プロトコルを紹介する。4 節では与えられたモデルが他の GCM シミュレーションと比較できるようにするために必要なモデルパラメーターを列挙する。要約は 5 節で述べる。

2) <http://www.palaeotrip.org/>

2020 年 2 月 8 日にはアクセスできたようだが 2020 年 11 月 17 日現在ではアクセス不可。

2 TRAPPIST-1e の気候シミュレーションと動機

2.1 惑星 GCM を相互比較する動機

全球気候モデル (GCM) は惑星大気や表面の物理過程を表現するために設計された 3 次元数値モデルである。GCM は実在惑星の大気や海洋をモデル化する最も洗練された方法である。GCM は動的コアを介して接続された 1 次元の時間進行気候モデルの複雑なネットワークとして見るができる (以下を参照のこと)。それぞれの 1 次元列には、放射移動、対流、境界層の過程、雲のマクロスケールとミクロスケールの物理学、エアロゾル、降水、地表の雪や海水による氷床、その他の複雑度の異なるプロセスの物理的パラメタライゼーションが含まれている。

3 THAI プロトコル

4 アウトプット

5 要約

THAI は新しいハビタブルな惑星の候補である TRAPPIST-1e に焦点をあてた惑星 GCM の相互比較プロトコルである。M 型の赤色矮星の近くにあるハビタブルゾーンに存在する地球型の系外惑星は、将来の観測で最初の地球サイズの系外惑星となる可能性が高いため、TRAPPIST-1e は現在では惑星 GCM の能力を比較するための最良のベンチマークである。この最初の論文では、すでに 4 つの GCM (LMDG, ROCKE-3D, ExoCAM, UM) が参加している実験で使われている GCM パラメーターと、惑星について提示した。しかし、もっと多くの GCM がこのプロジェクトに参加することを望んでいる。4 つのモデルを比較した結果は 2 つめの論文で発表され、THAI ワークショップが 2020 年の秋に開催される予定である。

付録 A 望遠鏡について

A.1 ジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡 (JWST)

A.2 欧州超大型望遠鏡 (E-ELT)

A.3 30 メートル望遠鏡 (TMT)

A.4 巨大マゼラン望遠鏡 (GMT)